

千葉県夷隅郡大多喜町台古墳群の一円墳から出土した 画文帯環状乳神獣鏡について

石井友菜^{1)*}・初村武寛²⁾・高梨俊夫³⁾・鈴木建人⁴⁾

¹⁾ 千葉県立中央博物館 大多喜城分館
〒 298-0216 千葉県夷隅郡大多喜町大多喜 481

²⁾ 公益財団法人元興寺文化財研究所
〒 630-8304 奈良市南肘塚 146-1

³⁾ 千葉県教育庁教育振興部文化財課森宮分室
〒 298-0203 千葉県夷隅郡大多喜町森宮 8-3

⁴⁾ 千葉県立中央博物館
〒 260-8682 千葉市中央区青葉町 955-2

*E-mail: y.ishi168@pref.chiba.lg.jp

(2023年11月29日投稿；2023年12月20日改訂；12月21日受理)

要旨 千葉県立中央博物館が令和3年度に寄贈をうけた、千葉県夷隅郡大多喜町台古墳群の一円墳から出土した画文帯環状乳神獣鏡の紹介をおこなう。この鏡は同型鏡群とよばれる資料のひとつで、東アジアの国際交流を物語る考古遺物として注目されてきた。近年は鏡の製作技術に関する研究の進展が目覚ましく、今回の寄贈によって同様の視点からの分析が可能になったことで、同型鏡群、そして房総の5・6世紀代の古墳研究に新たな情報をもたらしてくれることが期待できる。本稿では寄贈を契機に進めてきた調査成果の報告として、同一文様鏡との比較からみた本鏡の位置づけ、さらにこの鏡が出土した地域の歴史的環境について整理する。

キーワード： 同型鏡、画文帯環状乳神獣鏡、大多喜町、古墳、夷隅川流域

令和2年度、千葉県指定有形文化財「半円方格帯神獣鏡」(昭和30年12月15日指定)の所有者から、千葉県教育庁教育振興部文化財課に今後の資料の保管について相談があった。所有者は現品を大切に保管してきたが、高齢になり管理が不安であることから、千葉市内のしかるべき施設で保管してほしいとの意向であった。県文化財課では、県指定文化財を適切に保存活用できる県の機関である千葉県立中央博物館を紹介したところ、同館への寄贈を希望された。こうして、千葉県立中央博物館では令和3年度に鏡とその関連資料の寄贈をうけた。

この鏡は、いわゆる同型鏡とよばれる資料群のひとつである。六朝代の踏み返し鏡とする説(梅原1946)、そして「倭の五王」の中国遣使によって招来された鏡とする説が早くからあり(樋口1960、小林1965・1966)、当該期の東アジアの国際交流を物語る貴重な考古遺物として重視されてきた。一方、これらの鏡を各地域の首長がどのように入手・副葬したか、その背景にどのような社会動態があったかという、地域社会の実態を明らかにする上でも重要な意味をもつ資料といえる。

上記のような重要性を鑑みて、千葉県立中央博物館では寄贈をうけて以降、鏡の状態確認や関連資料との比較調査を進めてきた。本稿はその成果をもとに、鏡につい

ての紹介を行う。なお鏡の名称については、近年の研究動向をふまえ、県文化財の指定名称ではなく「画文帯環状乳神獣鏡」と呼称する。

1. 大多喜町台古墳群と鏡の概要、研究略史

(1) 大多喜町台古墳群と鏡の概要

大多喜町下大多喜の台地上の竹林中に、前方後円墳1基、円墳11基からなる古墳群が存在し、台古墳群と呼称されている。1952年春、千葉県立大多喜高等学校がこの古墳群の調査を計画し、早稲田大学教授の滝口宏らを招いて前方後円墳1基、円墳2基を発掘した(滝口1953)。

この調査報告に際し、同古墳群中の一円墳から1938年頃に発掘された資料として紹介されているのが、今回寄贈をうけた画文帯環状乳神獣鏡である。滝口によると、径15m、高さ2.5m程度の規模の円墳の、墳丘中心部の地表下約1mの位置から鏡が出土したとされるが、埋葬施設については明らかでない。この円墳は現存し、幅約2mほどの、墳頂から基底部まで達する発掘当時のトレンチ跡が今も明瞭に残っている。近年の研究では径25mほどと規模の認識が変わっている(白井

2002) もの、測量調査は未だ行われておらず、正確な規模は不明である。鏡はその後、県指定有形文化財(工芸品)に指定され、県内では稀な画文帯神獸鏡として度々紹介されている(渡辺 1964)。

この鏡は、埼玉稲荷山古墳における辛亥銘鉄剣の発見を契機に、同古墳から出土した鏡と同一文様をもつことから再び注目を集めた。1978年には樋口隆康・斎藤忠による調査が行われ、列島内に合計6面の同一文様鏡が存在することが確認された(斎藤 1980、樋口 1981)。この調査は新聞でも取り上げられている。その後は、県内の自治体史(小高 1991・白井 2002 など)などで実測図や写真とともに紹介されてきた。さらにこの鏡は状態の良好さから、同一文様鏡の報告・研究において銘文や文様の判読のために参照され、その度に詳細な拡大写真や実測図、拓本とともに紹介されている(関西大学文学部考古学研究室編 1992、車崎 2003 など)。

(2) 同型鏡としての研究略史

台古墳群およびその同一文様鏡に関する研究は、同型鏡の体系的な研究を行った川西宏幸によって大きく進展した。川西によって6面の鏡に画文帯環状乳神獸鏡Bという名称が与えられ、範傷や鏡径の検討をもとに踏み返しの世代差が論じられた(川西 2004)。その後、辻田淳一郎が新たに鈕孔製作技術を加えた網羅的な研究を行い(辻田 2018)、本鏡群をはじめ同型鏡群全体が共通する技術基盤のもとに製作されたことを論じている。また最新の研究に、初村武寛による三次元計測を応用した鏡径・断面形の比較分析があり(初村 2020・2021・2022・2023)、本鏡群については世代差の細分案を提示している(初村 2020)。このように、仔細な実見観察や精密な計測に基づく鏡の製作技術に関する多角的な分析が蓄積されている。一方で、同型鏡群の生産体制研究の要となる踏み返しの世代の分け方については、若干の見解の相違が生じている。

このような状況の中、台古墳群から出土した鏡をご寄贈いただいたことには大きな意味がある。同一文様鏡の中でも状態の良好さで知られる本鏡に先述のような視点からの分析ができれば、画文帯環状乳神獸鏡Bの再検討が可能になり、ひいては同型鏡群の研究に新たな情報をもたらしてくれることが期待できるためである。そこで本稿では、まず寄贈品全体の基礎的な情報を提示した上で、とくに鏡に重点を置いて分析を行う。

なお、研究史上では鏡が出土した円墳を「台古墳」、鏡を「台古墳鏡」とよぶ場合があるものの、現状では鏡が出土した円墳に名称はつけられていない。将来的には古墳群の調査を経て名称も整理されると期待したいが、本稿では混乱を避けるため鏡が出土した円墳に特定の名称を付与せず、他の同一文様鏡とよびわける際も暫定的に「台古墳群鏡」という名称を用いることとしたい。

2. 寄贈品の観察

寄贈品のうち、画文帯環状乳神獸鏡1点、写真1点、勾玉1点についての観察所見を記載する。

(1) 画文帯環状乳神獸鏡

鏡の文様や形状などの記録のため、三次元計測を実施した。使用機器、環境などは下記のとおりである。

機器：SHINING3D TranscanC (150 mm モード)

ソフト：EXscan C

モード：固定スキャンモード(テクスチャなし)

露光レベル：3～4

本資料については、所々に錆がみられ、一部に破損も認められるものの、全体としては極めて良好な遺存状況である。以下、図1に示した計測・撮影結果をもとに観察所見を述べる。なお、文様配置や鏡の向きは(川西 2004、辻田 2018)に依拠する。重量は506.2 gである。

鏡背面 鏡の直径は154.7 mmで、同型鏡群の中では中型鏡に属する。鏡縁の厚さは45 mmを測る。全面黒色で、光沢が強い。文様の間には土や赤色顔料が付着している。中央部に径25 mm、高さ11 mmほどの頂部がやや扁平な半円形の鈕をもつ。鈕孔は58分—28分方向に開口し、形状は円形で縦6 mm、横7 mm程度を測り、辻田淳一郎による同型鏡の鈕孔分類(辻田 2018)では3類に属する。伯牙側の鈕孔の向かって右側面はやや歪んで広がっている。鈕孔の左側面にはわずかな凹みがあり、原鏡の鈕孔痕跡と推測される。鈕孔底辺は鈕座面に一致する。鈕座は有節重弧文で、内区は環状乳によって8つに区分された四神四獣配置である。向かって左に東王父、右に西王母、上に伯牙・鍾子期・成連、下に黄帝を配する。その間には巨(維綱)を銜える獣像を4体配する。内区外周は12区分の半円方格帯で、その外側の斜面には鋸歯文帯、さらに外側には頂点に凹線をもつ界線がめぐり、方格内は4つに区切られており、4文字が書かれている。車崎正彦によれば、伯牙の向かって右側の方格から時計回りに「吾作明竟 幽凍三商 周刻無祉 配象萬疆 白牙學樂 衆神見容 百精並存 天禽四守 富貴安樂 子孫番昌 曾年益壽 其師命長」(車崎 2003 p.81)となり、吉祥と長寿を祈る内容とされる。界線の外側には画文帯がめぐり、これらは「六龍のひく雷車、日を奉じる神仙、羽仙(または玉女)、羽仙の騎る龍が二頭、羽仙、仙薬を奉じる羽仙、振り返った鳳、鳳、月を奉じる神仙、両手をひろげる熊人(または蟾蜍)、羽仙の騎る虎が二頭」(車崎 2003 p.82)であるという。最外周は渦文で、鏡縁は平縁である。辻田淳一郎は、上野祥史による神獸鏡の分類(上野 2000)をもとに、神獸像の配置と銘文の型式から、原鏡の製作年代を2世紀後半～3世紀初頭としている(辻田 2018)。

発掘時についたものと思われる大きな亀裂が伯牙—東王父間の鏡縁から鈕左側を通り黄帝付近まで達してお



図1. 台古墳群鏡の計測・撮影成果①（三次元形状計測画像・断面図・鈕孔写真）

鏡背面



鏡面



図1. 台古墳群鏡の計測・撮影成果②（鏡背面・鏡面写真）

鏡背面



【X線CTの計測環境】
SHIMADZU inspeXio SMX-225CT FPD HR(東京都埋蔵文化財センター)
管電圧 200 kV、管電流 70 μA
フォーマル・フル走査(ピッチ数 600、露光時間 250ms、アベレージ2)
ボクセルサイズ 0.2mm/voxel

鏡面



図2. 台古墳群鏡の細部写真・X線CT画像

り、画文帯と鋸歯文帯の間の界線が一部欠損している。また黄帝—西王母側の鏡縁部には凹みがあり、その周囲の文様が不鮮明になっている(図2左上)。この付近の厚さは、対称位置にある伯牙—東王父側の鏡縁と比べるとやや薄い。この部分の内部構造をX線CT画像(図2左中央)をもとに観察すると、空隙が認められた。こうした特徴をふまえると、この凹みについては湯口もしくは空気穴に関係するものと考えられる。また、黄帝と西王母付近の鋸歯文帯には、铸造時の欠陥によるものか、二重に盛り上がっている部分がある。この部分を間近で観察すると気泡がよく見える(図2左下)。

鏡面 鏡縁付近は黒い付着物や土が残り、また右側の大半部を緑青錆が覆っている。それ以外は白銀の面が良好に残り、光沢をもつ。鏡背面側にみられた赤色顔料は、鏡面には付着していない。緑青錆の部分には布痕が残存している(図2右上)。極めて細かに磨きあげられているが、わずかに研磨痕が残っている(図2右中央・下)。

蛍光X線分析 鏡や赤色顔料の材質を検討するため、東京都埋蔵文化財センターの助力を得て蛍光X線分析を実施した。計測部位・結果は図3の通りである。測定にあたっては、図3①～③・⑥～⑨は鏡の材質分析を目的とし、できる限り付着物の少ない箇所を選んだ。図3④・⑤は鏡背面に付着する顔料の分析を目的とし、赤味が比較的強い箇所を選んだ。まず鏡の材質については、測定箇所によって錫と銅の比率が逆転している。①・

③～⑦は錫(Sb)の含有量が銅(Cu)より高い。錫(Sb)の含有量が高すぎると複雑な文様をもつ鏡の铸造が不可能と考えられており(奈良県立橿原考古学研究所2018)、これらは本来の鏡の材質ではなく、表層の腐食部分の数値を示すものと考えられる。一方、出土時の破損によって新しい面が露出した部分を測定し、風化や錆、付着物の影響が最も少ないと考えられる②、また鏡面の白銅色部分を測定した⑧・⑨は、錫(Sb)より銅(Cu)の比率が高い。これらの数値が実際の材質の比率に近いものと考えられる。また、鏡背面全体に付着する赤色物質については、④・⑤にみられる水銀の含有量の少なさから、水銀朱ではなくベンガラの可能性が考えられる。

(2) 写真

台古墳群鏡とその共伴遺物を写したものと推測される紙焼き写真である(図4①)。法量は縦118mm、横158mmを測る。裏面は無地で、撮影時期、場所などの詳細は不明である。写真中には鏡のほか勾玉1、環状鏡板付轡1、辻金具もしくは小型の雲珠らしき馬具1、鉄鏃4、土師器底部片1が写っている。

台古墳群鏡の共伴遺物に関しての言及は、1952年に大多喜町で調査を行った滝口宏の報告が最も古い(滝口1953)。滝口によれば勾玉1、鉄鏃約50、馬具片があったとされ、一部は図化もされている(図4②)。しかし、今回寄贈をうけた写真の内容と滝口報告は、鏡と鉄鏃の



【蛍光 X 線分析の計測環境】
SHIMADZU EDX-8100 (東京都埋蔵文化財センター)
ターゲット Rh、管電圧 50kV、管電流 1000 μ A (auto)、測定時間 30sec
コリメータ: ①・⑥~⑨10mm、④・⑤1mm、他 3mm
解析範囲 0.00 ~ 35.00eV、FP 法

図 3. 台古墳群鏡の蛍光 X 線分析

一部を除いて相違点が多い。

これに対して、1978 年 10 月 5・6 日に台古墳群鏡を実見調査した樋口隆康は、共伴遺物を鉄剣 1、硬玉勾玉 1、鉄鏃、雲珠、轡、土師器底部などの破片としている (樋口 1981)。滝口報告とは異なる一方、今回寄贈をうけた写真のセットに近いことが注目される。

なお朝日新聞 1978 年 12 月 8 日朝刊の記事中では、共伴遺物について長さ 70 cm の鉄剣 1、勾玉 1、鉄鏃数十個、馬具の破片との記載がある。さらに朝日新聞 1978 年 12 月 15 日朝刊の記事中には「大多喜町の古墳から出た鉄鏃と勾玉」という写真が掲載されており (図 4 ③)、鉄鏃、勾玉、そして図 4 ①②にある辻金具もしくは雲珠と思しき遺物が写る。しかし、樋口の調査時期と新聞記事の日時は近いにも関わらず、記事中では轡についての言及がない。同時期に鏡の紹介を行った斎藤忠も、轡については言及していない (斎藤 1980)。

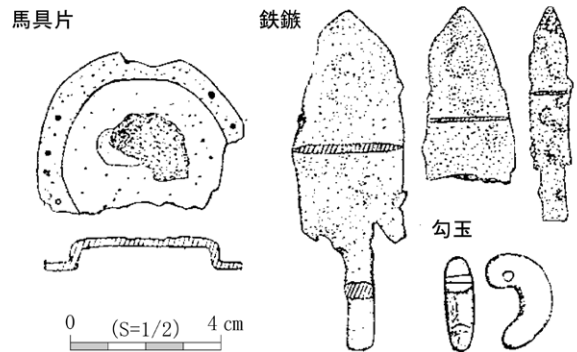
以上のとおり、台古墳群鏡の共伴遺物に関する情報はやや錯綜しており、注意を要する。ただしこれらの情報は、鏡の副葬年代を考える上で不可欠であるため、後で検討を行う。なお図 4 に写る鉄製品類は、寄贈品に含まれていない。

(3) 勾玉

実測図・写真・X 線 CT 画像を図 5 に示した。濃緑色の中に白色が混じる色調を呈し、重量は 29.1 g である。長さ 46 mm、幅 16 mm、厚さ 14 mm を測る。表面は丁寧に磨き上げられており、研磨痕はほとんど観察でき



①寄贈写真



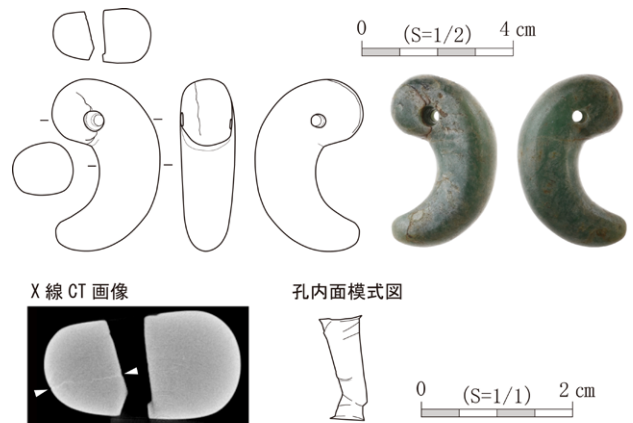
②(滝口 1953) 実測図



③朝日新聞掲載写真

(古代照らすか「五面の鏡」1978年12月15日朝刊 p.15 提供:朝日新聞社)

図 4. 寄贈写真と既往研究における台古墳群の出土品



【X 線 CT の計測環境】
ヤマト科学 TDM1000H-11 (2K) (千葉県産業支援技術研究所)
管電圧 100 kV、管電流 40 μ A
フォーマル・フル走査 (ビュー数 1440、露光時間 200ms、アベレージ 12)
ボクセルサイズ 0.2mm/voxel

図 5. 勾玉の実測図・写真・X 線 CT 画像

表 1. 画文帯環状乳神獣鏡 B の出土古墳

No.	出土古墳地名	出土地(県名・市町村名)	墳形	墳丘長(m)※	埋葬施設	共伴出土品	出典
1	台古墳群	千葉県・夷隅郡 大多喜町	円	(25)	不明	勾玉・鉄鏃・馬具片(轡・雲珠) (・剣・土師器片)	滝口1953 (樋口1981)
2	埼玉稲荷山古墳	埼玉県・行田市	前方後円	120	礫槨 舟形木棺	札甲・刀・剣・矛・鉄鏃・鏡板付轡・鞍金具 鈴杏葉・壺鏝・鉸具・雲珠・三環鈴・銀環 斧・鉋・鉗・刀子・鑊・砥石	埼玉県教育委員会 1980
3	八幡観音塚古墳	群馬県・高崎市	前方後円	91	横穴式石室 組合式木棺	札甲・刀・矛・石突・鉄鏃・弭・轡・鏡板 杏葉・鏝・鎖・辻金具・雲珠・端金具・鞍 銅銚・銀釧・須恵器・釘・鏝	群馬県教育委員会 1963
4	波切塚原古墳	三重県・志摩市	円	(20)	不明	勾玉・管玉・刀・須恵器	関西大学文学部 考古学研究室編1992 志摩市教育委員会2018
5	伝京都郡	福岡県・京都郡 みやこ町	不明	不明	不明	不明	藤井2014
6	伝山ノ坊古墳群	宮崎県・児湯郡 新富町新田原	円墳	(10)	不明	鏡・刀剣・勾玉・管玉・小玉・金環	梅原1941

※()内は推定墳丘長。

ない。孔径は表が5 mm、裏が4 mmで、孔内面半ばに段差があり、両面穿孔と考えられる。X線CT画像(図5下)をみると、表面から11 mm程度の部分まで穿孔した後、裏面から2 mm程度の穿孔をしていることが分かる。孔内面には溝状の痕跡が目立ち、中でも表面から8 mm程度の深さでひときわ深い溝があり、X線CT画像をみるとこの溝から勾玉の背面まで亀裂が伸びていることが観察できる。勾玉頭部には図5の実測図にも示した通り大きなヒビがあるが、これは穿孔時に生じたものと考えられる。

勾玉は多くの先行研究で、鏡の共伴遺物として紹介されている。滝口報告では、勾玉の法量は長さ25 mm、幅9 mm、厚さ7 mmとされる。(2)で紹介した寄贈写真の勾玉について、写真のメジャーをもとに算出した法量もほぼ同様の数値となる。しかしこの数値は、今回の寄贈品の法量とは異なっている。さらに色調をみると、寄贈写真や新聞掲載写真(図4)が白味の強い色調であるのに対し、寄贈品の勾玉(図5)は濃緑色と、色調も異なっている。そのため、今回寄贈をうけた勾玉が台古墳群鏡に伴うものかどうか、現時点では不明である。勾玉の来歴などの解明は今後の課題とし、ここからは鏡を対象を限定して分析を進める。

3. 同一文様鏡との比較分析

台古墳群鏡については、同一文様の鏡が表1のとおり存在し、川西宏幸によって画文帯環状乳神獣鏡Bと分類されている(川西2004)。これらの鏡との比較分析から導かれる鏡の製作順序、踏み返しの世代差の認定は、同型鏡群の生産体制の研究において重要な意味をもつ。そこで本稿では、先行研究を参照し、主に範傷(川西2004)、鈕孔製作技術(辻田2018)、鏡径・断面形(水野2021、初村2020ほか)の3点から、台古墳群鏡および同一文様鏡に関する検討を行う。

(1) 範傷

川西宏幸によって指摘された以下の3つの範傷の存在が、その後の研究の基礎となっている(川西2004 pp.21-22)。

傷a 黄帝像の向かって右外方に位置する半円の外縁と界線とのあいだが、鋳潰れる。

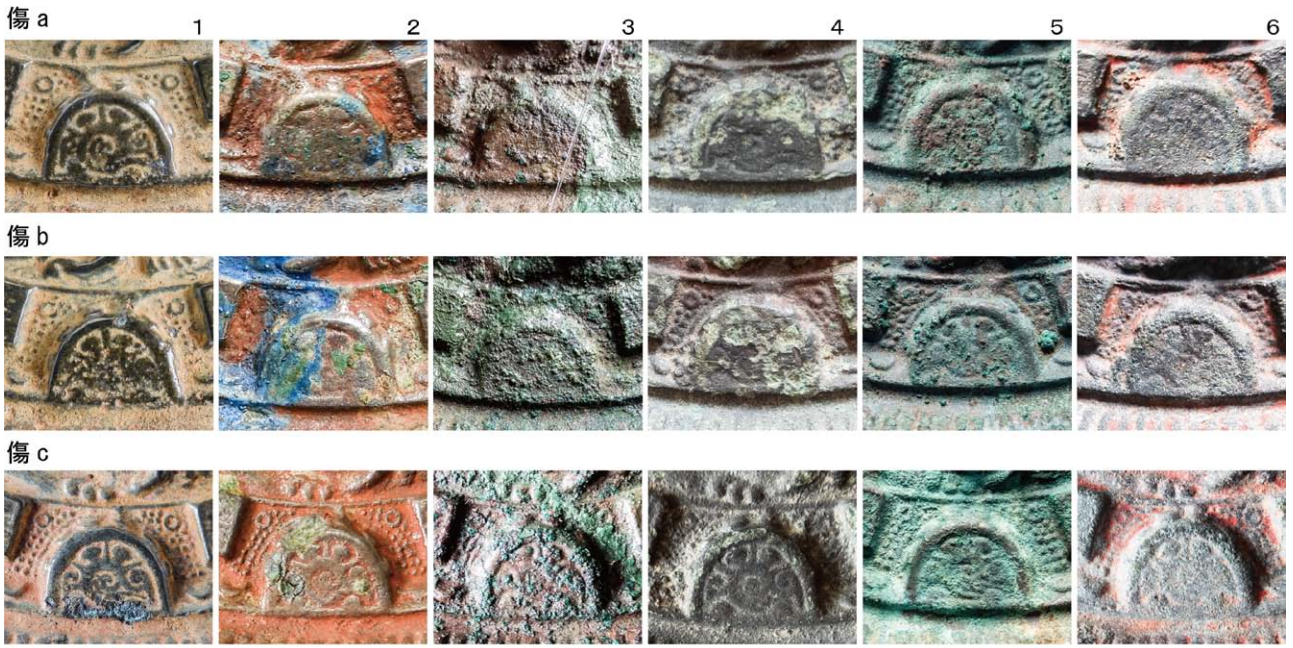
傷b 方格を隔てた、向かって右の半円にも、同じ個所に鋳潰れがある。

傷c 東王父の向かって右外方の半円の外縁と界線との間に発生した鋳潰れ。

川西は、台古墳群・稲荷山鏡は傷cの鋳潰れが極めて小さい一方、そのほかの鏡は鋳潰れの範囲が大きく「二条に盛りあがって半円の斜面にまで及び、かつ傷の形状が同じ」(川西2004 p.22)と指摘している。そして傷cの違いを鍵として6面の鏡を2群に大別し、それぞれ異なる原鏡からの踏み返しを想定した。初村武寛も、傷の認識については川西の見解を追認している(初村2020)。一方、辻田淳一郎は波切塚原鏡の観察をもとに、傷cを「拡大」と呼べるかどうか疑義を呈しつつ、鋳上がりの差など他の特徴を加味し、群の大別や製作順序については川西と同様の見解を示している(辻田2018)。このように同型鏡群を網羅的に検討した3名とも、画文帯環状乳神獣鏡Bの範傷についてはほぼ同様の結論に達している。しかし、同型鏡群の中でも同一文様の鏡の数が多く傷の増加が明瞭なものに対して、本資料群の範傷、とくに傷cの認定はやや曖昧さを残している。

そこで、良好な遺存状態である台古墳群鏡の観察成果をもとに、改めて範傷を比較した。この結果が図6である。まず傷aをみると、全体的によく似た形状の傷が共通して残っている。続いて傷bは、稲荷山・観音塚鏡が付着物や接合痕で観察しにくい、他の例をみる限り、やはり全体的によく似た傷があることが確認できる。

最後に傷cについては、接合痕や付着物で見えづらい



※No. は表 1 に対応。

図 6. 画文帯環状乳神獸鏡 B の傷 a～c の比較

界線の途切れがある



※No. は表 1 に対応。

界線の途切れがない



写真の位置



図 7. 画文帯環状乳神獸鏡 B の傷 d の比較

観音塚鏡は判断が難しいが、台古墳群・稲荷山鏡の傷が確かに似ており、極めて小さいことが分かる。しかし、波切塚原鏡は辻田の指摘通り「拡大」とまで言えるか判断が難しい。また拡大のグループに含まれている伝京都郡の鏡についても、ちょうど傷の部分に錆が多く出て、「拡大」の状況が確認し難い。これらに対して伝山ノ坊鏡は、台古墳群・稲荷山鏡に比べればたしかに拡大しているようにも見える。ただし伝山ノ坊鏡の場合は踏み返し時の状況によるものか、台古墳群鏡に比べて文様が鈍化している。そのため傷 c だけが拡大しているのか、文様の鈍化によって全体がひとまわり大きく見えているのか、判断が難しい。

既往研究の範傷を再検討した結果、やはり鍵となる傷

c の認識に曖昧さが残った。そこで、状態の良好な台古墳群鏡をもとに、ほかに範傷がないかを確認した。この結果、図 7 のように、台古墳群・稲荷山鏡では西王母の向かって右側にある獣像と半円の間で、界線が途切れている個所があった。これを仮に傷 d とよぶ。この傷を他の鏡でも探したところ、付着物や風化によって分かりづらいものの、伝京都郡・伝山ノ坊鏡にもあることを確認できた。一方、観音塚・波切塚原鏡には確認できなかった。

この結果、6 面の同一文様鏡が、傷 a～d をもつ台古墳群・稲荷山・伝京都郡・伝山ノ坊鏡、傷 a～c をもつ観音塚・波切塚原鏡の 2 グループに分けられた。以下、これをふまえて他の属性についても検討を加える。

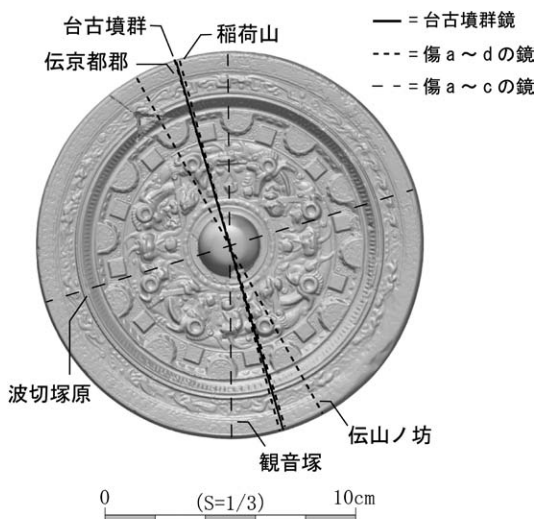


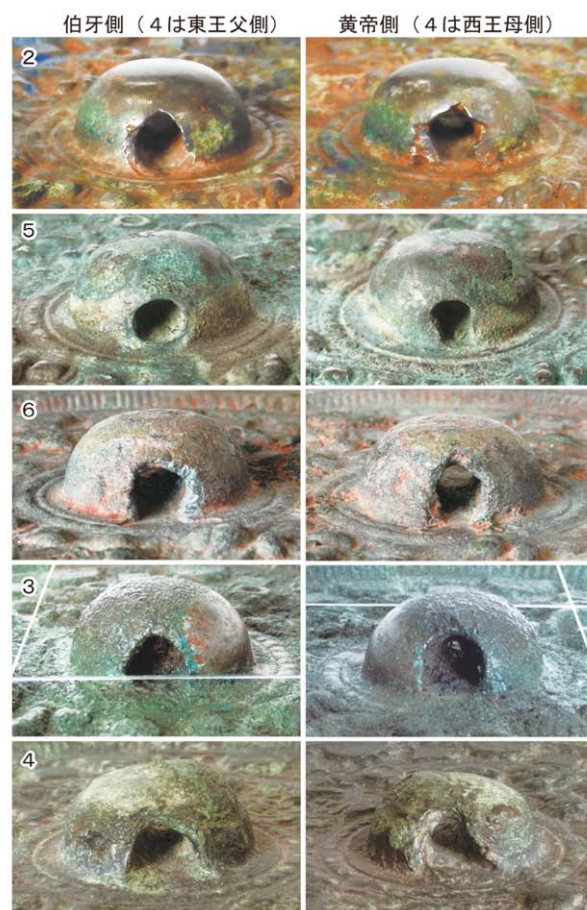
図8. 画文帯環状乳神獸鏡Bの鈕孔方向

(2) 鈕孔製作技術

辻田淳一郎によって新たに同型鏡群の分析に加えられた属性である。この属性から見出された同型鏡群全体の技術的共通性・限定性は、生産が短期集中的に行われたとする「特鑄説」の根拠のひとつとなっており（辻田2018）、同型鏡群の生産体制を検討する上で不可欠な属性である。そこで、鈕孔方向、鈕孔形状の2点に注目して鈕孔製作技術について検討する。

鈕孔方向 画文帯環状乳神獸鏡の鈕孔方向を図8に示した。台古墳群鏡の方向は、稲荷山・伝京都郡鏡とほぼ一致している。これに対し、観音塚・伝山ノ坊鏡がややずれた位置にあり、さらに波切塚原鏡が最も方向を違えている。この点は既に指摘があり（川西2004、辻田2018）、台古墳群鏡を加えても大きく変わるものではない。しかし、先述の范傷の検討結果をふまえると、一定の傾向が見てとれる。まず、傷a～dを共有する台古墳群・稲荷山・伝京都郡鏡の3面が極めて近いという点である。台古墳群鏡には先述のとおり原鏡の鈕孔痕跡が確認でき、この位置から考えると、これらは原鏡に忠実に鈕孔方向を設定したと考えられる。この3面は同一文様鏡中でもひととき文様が明瞭に鑄出されている一群であることも付記しておきたい。対して伝山ノ坊鏡は、3面とはわずかにずれた方向に鈕孔が設定されている。伝山ノ坊鏡の鈕孔は、向かって左側にやや凹んで変形している部分が認められ、この位置は台古墳群鏡から推測される原鏡の鈕孔の位置と合致している。よって、伝山ノ坊鏡だけ何らかの理由で鈕孔方向をわずかに変更しているものの、傷a～dをもつ鏡は、概ね原鏡と同じにすることを意識して鈕孔方向を設定した一群と捉えられる。これに対して傷a～cをもつ観音塚・波切塚原鏡の鈕孔方向は、先の4面と異なっている。またこの2面には、伝山ノ坊鏡のような原鏡の鈕孔痕跡は確認できない。

范傷によって分けられたグループ間で孔方向に差異がみられるという傾向は、同型鏡群の中でも画文帯環状



※No. は表1に対応。

図9. 画文帯環状乳神獸鏡Bの鈕孔形状

乳神獸鏡A、浮彫式獸帯獸A、神人歌舞画像鏡、画文帯同向式神獸鏡Cなどで確認されており（川西2004、辻田2018）、本資料群でも同様の結果が得られた。

鈕孔形状 この結果をふまえて、さらに鈕孔形状の比較を行う。各鏡の鈕孔の写真を図9に示した。傷a～dをもつ鏡のうち、台古墳群・稲荷山・伝京都郡鏡はいずれも幅6～7mm程度の円形鈕孔で、辻田分類3類に属する。伝山ノ坊鏡は、黄帝側の鈕孔は幅5～6mm程度の円形、黄帝側の鈕孔が幅7mm程度の半円形とやや特殊である。しかし、円形を基調としながら下部がやや方形に突出する黄帝側の鈕孔形状は稲荷山・伝京都郡鏡とよく似ており、同じ製作技術によるものと考えられる。これらに対して、傷a～cをもつ観音塚・波切塚原鏡は半円形の鈕孔で幅8～9mm程度と前述の鏡よりわずかに大きく、辻田分類1類に属する。伝山ノ坊鏡はやや特殊ながら、同じ范傷を持つグループは、鈕孔形状も類似することが確認できた。

(3) 鏡径・断面形の比較

踏み返し時におこるとされる鏡の収縮は、同型群の製作順序を考える上でも重視され、主に鏡縁部左右の2点間の距離、つまりは鏡径をもとに検討されてきた。しかし鏡縁部は製作時の研磨や使用時の擦れによって大きさが減じやすく、この数値だけでは収縮による鏡体形状の違いをとらえきれない可能性がある。これに対して、鏡

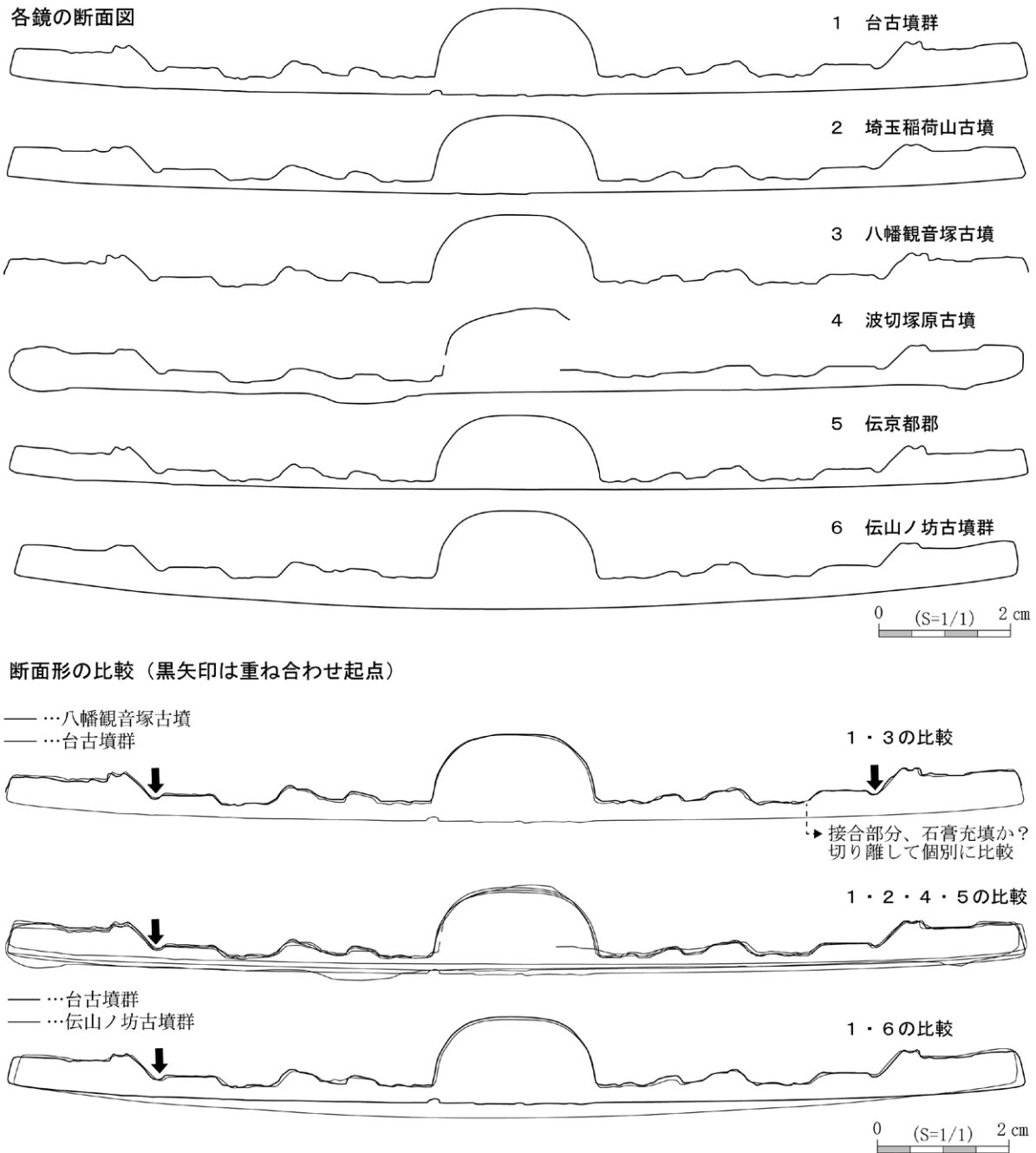


図 10. 画文帯環状乳神獸鏡 B の断面比較

縁部の改変状況にとらわれずに鏡体の微細な違いを直感的に把握できる手法として、断面形の比較がある(水野 2021)。そこで、これらを高精度の計測をもとに検討するため、台古墳群鏡および同一文様鏡について 3D スキャンを実施した。観音塚鏡は、テグスで桐台に固定された状態であったため、鏡面の計測を行えていないが、その他の資料についてはすべて鏡背面・鏡面を計測し、一体のデータを構築した。そののちに、点群のデータをメッシュ化し、stl データとした。なお、計測から stl データ作成までに用いた機器・ソフトは以下の通りである。

観音塚・稲荷山・波切塚原鏡

計測機器:Konicaminolta Range7(TELE レンズ使用)
計測時使用ソフト:Konicaminolta rangeviewer

位置合わせ・メッシュ化ソフト:Innovmetric
伝山ノ坊鏡

計測機器:SHINIHG3D Einscan Pro (固定スキャンモード)

計測時使用・位置合わせ・メッシュ化ソフト:
Einscan Pro Series

台古墳群・伝京都郡鏡

計測機器:SHINING3D TranscanC (150 mm モード)

計測時使用・位置合わせ・メッシュ化ソフト:
EXscan C

これらをもとに作成した stl データを、VGstudio MAX (Volumegraphics GmbH) に読み込み、位置合わせを実施した。その際に断面像の比較を行った。なお画

文帯環状乳神獸鏡 B 全体については既に（初村 2020）の分析があるため、本稿では台古墳群鏡を中心に各資料との比較検討を行う。

鏡径 観音塚鏡は鏡面が計測できていないが、鏡面だけの計測データで 154.5～156.0 mm であった。鏡面～鏡背面まで計測できた資料としては、台古墳群鏡が 154.7～154.8 mm、稲荷山鏡が 154.8～155.3 mm、波切塚原鏡が 154.2 mm～155.7 mm（錆による変形が大きい）、伝京都郡鏡が 154.5～154.6 mm、伝山ノ坊鏡が 152.6～153.4 mm であった。鏡背面の計測により計測サイズが大きくなる可能性が高いので、観音塚鏡は断面形で文様の収縮等を比較することが必須となるが、台古墳群・稲荷山・波切塚原・伝京都郡鏡はほぼ鏡径が等しい。また伝山ノ坊鏡は鏡径だけをみればわずかに小さい。

断面形 各鏡の断面形状について図 10 に示した。これらの断面図を重ねて各資料間の差異を見てみたい。

台古墳群鏡よりもわずかに横方向に広いものとしては観音塚鏡がある。しかしこの鏡は発見当初 7 破片ほどに割れており、接合の際に破片の間に石膏らしきものを充填していることが報告書写真から分かる（群馬県教育委員会 1963）。肉眼観察でも、西王母付近の界線が鏡縁方向に向かってずれていることが確認できた。西王母側は、このために本来の径より少し大きくなっている可能性がある。これをふまえて遺存状態の良い東王父側から西王母まで、西王母から鏡縁までの断面形をそれぞれ台古墳群鏡と比較すると、形状の一致度は高い。

台古墳群鏡と断面形が非常に近く、大きな差異が認められない資料として、稲荷山鏡・波切塚原・伝京都郡鏡がある。文様の上下方向へのずれはわずかに認められるが、横方向へのずれはほとんど見られない。

伝山ノ坊鏡については鏡径がわずかに小さいが、断面形を台古墳群鏡と比較すると、鏡背面については鏡縁部以外にそれほど大きな違いは認められない。鏡径の違いは後述する鏡縁部の改変に起因する可能性がある。ただし、他の鏡と比べた時に、鏡面の反り、厚みには明らかな違いがみられる。これについては、鏡の量産をすすめていくにあたり、台古墳群・観音塚・稲荷山・波切塚原鏡が鏡背面の文様のみならず鏡の厚みについてもコピーされていたが、伝山ノ坊鏡は何らかの事情でこの規範から明らかに外れたものであると考えられる。

（4）その他

その他、鏡の生産に関わる可能性のある諸特徴について、観察所見を列記しておく。

鏡背面の研磨 台古墳群鏡には、それほど明瞭には研磨痕が観察できない。これに対して、波切塚原鏡には明瞭に研磨痕が確認できる。図 11 上には最も観察しやすい場所を示したが、この場所以外にも鏡背面全体、神像や獣像の上にも研磨が加えられている。隣に示した台古墳群鏡の写真と比べると、その差がよく分かる。三角縁神獸鏡の研究では、铸造時に文様の出が悪かった箇

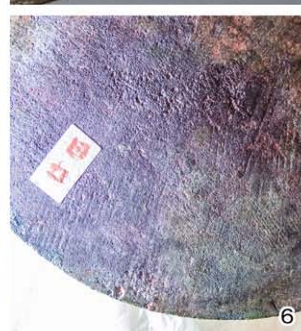
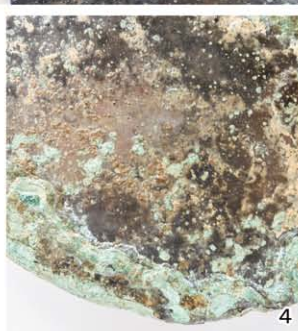
鏡背面の研磨



鏡縁文様



鏡面の比較



※No. は表 1 に対応。

図 11. 画文帯環状乳神獸鏡 B にみられる細部の違い

所に集中して研磨を行うことが指摘されており（鈴木 2016）、波切塚原鏡の研磨も同様の可能性が考えられる。

鏡縁文様 台古墳群鏡は、鏡縁付近の渦文が明瞭に鑄出されている。この部分は同一文様鏡内でも文様の出に個体差が認められるが、伝山ノ坊鏡は明らかに異質で、渦文が線状の痕跡によって消されている（図 11 中央）。踏み返し時の何らかの事情で、鑄型を修正した可能性が考えられる。鏡縁の径や形状が他鏡とやや異なるのも、この修正に起因するものと考えられる。

表 2. 画文帯環状乳神獸鏡 B の重量・体積・密度

No.	出土古墳地名	出土鏡の重量 (g)	体積 (cm ³) ※	密度 (g/cm ³)	備考
1	台古墳群	506.2	78.61	6.44	欠損有 付着物有
2	埼玉稲荷山古墳	502.6	69.61	7.22	付着物有
3	八幡観音塚古墳	未計測	—	—	付着物有
4	波切塚原古墳	498.5	76.07	6.55	欠損有 錆変形有
5	伝京都郡	521.1	58.03	8.98	欠損有 付着物有
6	伝山ノ坊古墳群	757.5	93.08	8.14	付着物有

※ 3Dデータから算出。ただし鈕孔内など計測できない部分はソフト上で穴埋めしているため、正確な数字ではない。

鏡面 前述の通り、台古墳群鏡の鏡面は研磨痕がわずかに認められる以外は細かに磨き上げられ、光沢を呈している。鏡面の観察ができない観音塚鏡を除き、稲荷山・伝京都郡・波切塚原鏡も、付着物や錆の少ない部分を観察する限りはおおむね同じ状態である。これに対して伝山ノ坊鏡は全体的に光沢がなく、また台古墳群鏡とは異なる荒い研磨痕が残るといった差異が認められた (図 11 下)。

重量・体積・密度 鏡の重量を計測し、さらに 3D データをもとに体積・密度を計算し、表 2 に示した。これをみると、やや稲荷山鏡の密度が高いが、伝京都郡・伝山ノ坊鏡以外はおおむね数値が一致している。一方、伝京都郡・伝山ノ坊鏡は数値が大きい。小西正彦によれば、銅鏡の重量の違いは主に厚みに起因し、材質の成分比などはそれほど数値に影響しないとされる (小西 2008)。伝京都郡鏡の数値は解釈が難しいが、伝山ノ坊鏡の数値が大きい理由は先に検討したとおり鏡面側の厚みの改変によるものと思われる。ただし肉眼観察では台古墳群・稲荷山・伝京都郡・観音塚鏡の表面に光沢が認められるのに対し、伝山ノ坊鏡は光沢がなくボソボソとした質感という違いが認められ、あるいは材質にも若干の違いがあるのかもしれない。

(5) 小結 画文帯環状乳神獸鏡 B の製作順序

以上、同型鏡群についての体系的な研究を参照しながら、画文帯環状乳神獸鏡 B の再検討を行った。この検討結果をふまえて、本稿における画文帯環状乳神獸鏡 B の製作順序の案を示したのが図 12 である。既に先学の詳細な分析があり、追認に留まった面も多いが、本稿では状態の良い台古墳群鏡の観察によって新たに確認できた範傷 d を起点に、諸属性を加味して伝京都郡鏡・伝山ノ坊鏡を台古墳群・稲荷山鏡のグループに変更した。

なお先述したとおり、既往研究では本鏡群の製作順序について若干の見解の相違がある。最も大きな違いは、範傷や鈕孔製作技術から伝山ノ坊鏡を台古墳群鏡などと同世代とするか (川西 2004、辻田 2018)、あるいは鏡径・断面形を重視し台古墳群鏡などから 1 世代くだるものとするか (初村 2020) という点である。たしかに、状態

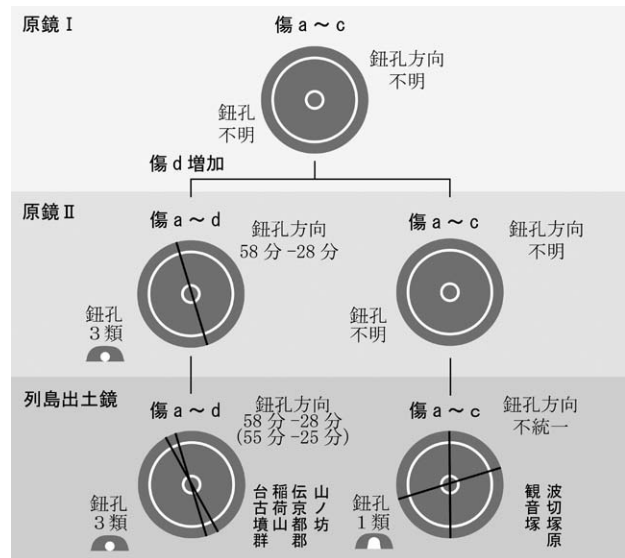


図 12. 画文帯環状乳神獸鏡 B の製作順序案

の良い台古墳群鏡と比較したときに際立つ伝山ノ坊鏡の諸特徴が、踏み返しの世代差に起因する可能性も否定はしきれない。ただし、範傷という決定的な証拠を確認できないために、現状では世代差を分ける材料も欠ける状態にある。また伝山ノ坊鏡の径はたしかに小さいが、他鏡との違いは鏡縁形状の差によるところが大きい。この部分は鑄型が修正されている可能性があり、鏡背面のほかの個所の形状は他鏡とそれほど大きな違いがない。また同型鏡群内でも鏡種によって収縮度が違うこと、製作実験でも同型技法による径の収縮現象のメカニズムは不明瞭な点があることが指摘されており (水野 2021)、鏡径の差は同一世代内の振れ幅に収まる可能性も捨てきれない。さらに鈕孔製作技術をみても、台古墳群・稲荷山・伝京都郡鏡とは共通性が高いことが分かる。

将来的には新たな資料の発見や異なる視点からの分析により変更となる可能性もあるが、以上の理由から本稿では伝山ノ坊鏡も台古墳群鏡と同世代で、諸特徴は製作時の何らかの特殊な事情によるものと考えておきたい。

4. 台古墳群鏡の副葬年代と歴史的環境

これまでは同型鏡という資料群中における台古墳群鏡の位置づけについて検討してきた。一方、上野祥史による小櫃川流域の分析 (上野 2013) が示すように、地域の首長層がいつ鏡を入手し、そして副葬に至ったのかという研究も、この鏡の歴史的な意義を考える上で重要な意味をもつと考える。そこで本稿では最後に、将来的にこのような研究を行うための準備として、台古墳群鏡の副葬年代について検討し、さらに台古墳群周辺の歴史的環境について整理する。

(1) 台古墳群鏡の副葬年代

まず同一文様鏡をもつ古墳の年代をみると、埼玉稲荷

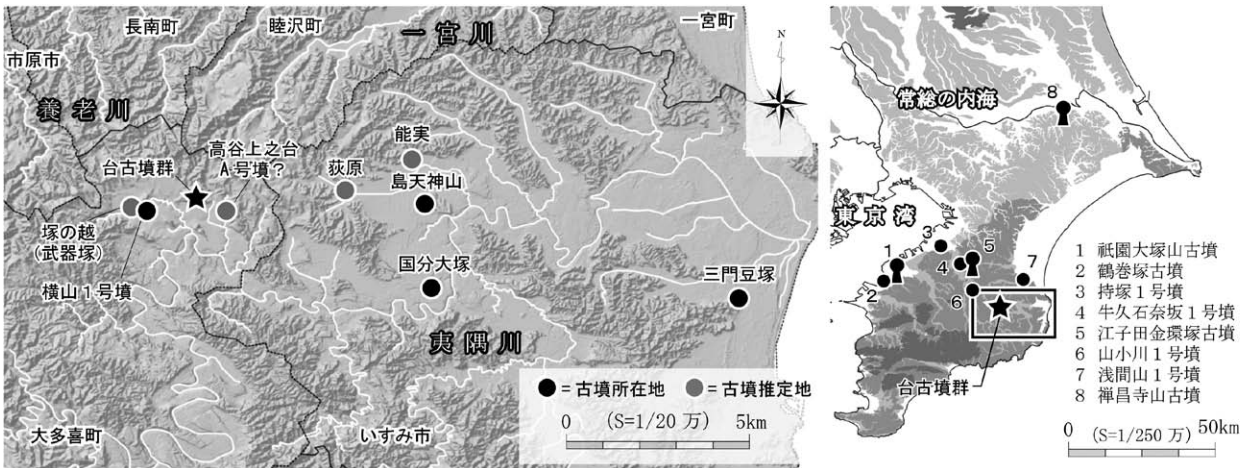


図 13. 台古墳群周辺の歴史的環境

山古墳は TK23・47 期（山田 2008）、八幡観音塚古墳は TK209 期（島田 2003）とされる。波切塚原古墳は近年、TK43 期の須恵器の共伴が明らかになった（志摩市教育委員会 2018）。伝京都郡・伝山ノ坊は年代推定が難しいが、同一文様鏡をもつ古墳でも、入手後すぐの副葬と思しき例と、一定期間保有されてからの副葬という例がある。この点は他の同型鏡と同様である。よってこれらの古墳の年代をそのまま台古墳群鏡にあてはめることはできず、共伴遺物から副葬年代を推測する必要がある。

ただし先述のとおり、台古墳群鏡の共伴遺物についての情報は錯綜しており、注意を要する。本稿では滝口報告（滝口 1953）と寄贈写真にうつる遺物のうち、勾玉を除いた環状鏡板付轡、辻金具もしくは雲珠、鉄鏃の 3 点について年代を検討する。

環状鏡板付轡 滝口報告には存在せず、寄贈写真および樋口論文にのみ確認できる遺物である。写真のメジャーをもとに法量を算出すると、鏡板は横 87 mm、縦 77 mm 程度の鉄製の楕円環に、横 30 mm、縦 13 mm 程度の方形立間が付属する。引手は軸が 1 本で一方の端環を壺とするタイプで、壺部分でくの字に屈曲する。鏡板や引手に比べて残存状況が悪く途中で折れているため全体形状が分からないが、銜も写真中に見える。写真上での検討となるため詳細は不明だが、連結方法は銜の端環に鏡板と引手を揃める引手・銜式の可能性が考えられる。花谷浩の研究を参照すると小型方形立間 c 類か長方形立間 a 類に該当すると思われ、様式としては第 2 群に属し、年代は MT85・TK43 を中心とし一部は TK209 型式にくだるとされる（花谷 1986）。寄贈写真の立間の上部にみえるのが吊金具の残存部分だとすると、花谷が小型方形立間 c 類の具体例として挙げた栃木県浅間山古墳に極めて近い形状となる。群馬県域の編年を検討した堀内紀明は、立間の横幅が縦幅より広い大型矩形立間轡の年代を TK43～TK209 期としており、花谷の編年に照らし合わせた際の年代観とおおよそ一致する（堀内 2007）。

辻金具もしくは雲珠 寄贈写真と滝口報告に共通して存在する遺物である。写真を見るとわずかに金銅張

らしき痕跡が確認でき、台古墳群鏡の持ち主が金銅装馬具を有していたことが今回新たに判明した。写真のメジャーや滝口報告の図面から法量を確認すると最大径 56 mm 程度で、雲珠だとすると小型の部類に属する。無脚雲珠であれば年代は少なくとも MT15 期以降となる（宮代 1998）。類例は茨城県磯崎、埼玉県黒田 1 号墳でも確認されており、年代は MT15～TK10 期と考えられている（片平 2017、堀内 2017）。法量的には辻金具の可能性も考えられ、類例を探すと栃木県伯仲 1 号墳の辻金具が法量・形状とも類似する。この古墳では大型矩形立間環状鏡板付轡と鉄地金銅張の辻金具がセットをなす点も注目される。伯仲 1 号墳の年代は、内山敏行によって TK43 期とされている（内山 2023）。なおこの資料については鞍金具とする見解もあり（松尾 2004）、年代は松崎元樹によって TK43 期とされている（松崎 2017）。

鉄鏃 寄贈写真と滝口報告に共通して存在する遺物である。全体形状が分かるものが少なく年代推定は難しいが、短頸平根系鏃の形状は、水野敏典の編年（水野 2003）で後期 2 段階（集成編年 10a 期）とされる神奈川県三保杉沢古墳と類似する。

以上、鏡の共伴遺物について可能な限りで年代を検討した。形状が不明瞭なものも多く年代を絞り込むことが難しいが、ひとまず本稿では最も共伴が確実である辻金具や鉄鏃を重視し、台古墳群鏡の副葬年代を少なくとも MT15 期以降とし、下限を TK43 期頃と考えておきたい。

（2）台古墳群の歴史的環境

最後に、台古墳群の歴史的環境について整理する。まず、台古墳群が所在する夷隅川流域の古墳を概観する（図 13 左）。横山遺跡では 4 世紀代の小規模な方墳、5 世紀後半代の円墳が確認されている。また横山 1 号墳（円墳か、規模不明）では明治期の小学校建設のために取り崩された際に鉄地金銅張の f 字形鏡板付轡・剣菱形杏葉が発見されており、田中由理によって MT15 期と推測されている（田中 2004・2005）。このほか打岡台古墳群（玉口・大川 1954）や高谷古墳群（渡辺・實藤 1955）

の発掘調査で小規模な円墳から鉄剣・鉄刀が発見されているものの、これらを除くと夷隅川流域ではほとんど古墳の発掘例がない。ただし、古記録をたどるとさらにいくつかの古墳の存在を知ることができる。大多喜町内では、天保3(1832)年頃に田丸健良によって書かれた『房総志料続篇』に、三明寺付近にあった「塚の越」の北方にある古墳(武器塚とも呼ばれる)から文化4(1807)年に鏡・剣・メノウ製勾玉が出土したとの記載がある(千葉県郷土資料刊行会1972、ただし夷隅郡役所1923ではこの古墳が横山1号墳を指すようにもとれる記述がある)。また、高谷上之台A号墳でも鈴杏葉、轡、金銅製雲珠などの馬具、札甲があったとされる(川戸1979、地名から高谷古墳群の近隣か)。いすみ市に目を移すと、荻原では鉄地金銅張杏葉が出土し、能実の古墳からは径7.1cm、厚さ1cm、三角縁の厚さ2cm、乳が五つの鏡が出土したとされる(滝口1953)。また国吉地区では島天神山古墳(前方後円墳、規模不明)から石棺と数種の武器が出土したとされる(川戸1979)。同地区の国分大塚古墳(円墳、規模不明)は、金銅装方頭大刀、刀子、耳環、銅鏡、切石積石室を有していたとされ(森1977)、終末期古墳と考えられる。夷隅川の最下流域では、人物・家形・水鳥形埴輪、直刀、土師器、石棺、そして鏡が出土した三門豆塚古墳(墳形、規模不明)の存在が知られている(中村1972)。このように列挙すると、現在は確認できない古墳や遺物がほとんどで追跡調査が必要であることは勿論だが、高塚が少ないとされてきた地域ながら全時期を通じて古墳が連綿と造営されている点、さらに鏡や馬具の出土が多い点に注目できる。

続いて、同型鏡流入期以降で、夷隅川流域周辺との関わりが考えられる古墳について整理する(図13右)。房総において、台古墳群のほかに同型鏡をもつ古墳としては、画文帯四仏四獣鏡をもつ木更津市の祇園大塚山古墳(前方後円墳、100m)、鶴巻塚古墳(円墳、34m)が知られ、どちらも東京湾沿岸の小櫃川流域に属する。また同型鏡の流入期以降、大型の倭製鏡をもつ古墳として市原市持塚1号墳(円墳、40m)、同市牛久石奈坂1号墳(円墳、30m)がある。いずれも養老川流域に属し、とくに後者はそれまで古墳の造営が希薄であった中流域に立地する。さらに流域最奥部の山小川1号墳(円墳、約20m)では、大型広根鉄鍬およびTK23期の須恵器が発見されている。一宮川流域に目を移すと、小型の倭製鏡をもつ睦沢町浅間山1号墳(円墳、27m)が胡籙金具を有しており、年代は5世紀第四半期(土屋2020)とされている。このように、東京湾沿岸に同型鏡が集中し、当該期の倭王権における上総地域勢力の重要性が窺えること、かつ5世紀後半以降の養老川流域～一宮川流域の小・中規模の円墳が、新式の武器や鏡を入手していることが分かる。また養老川中流域では、時期が少し下るとf字形鏡板付轡をもつ市原市江子田金環塚古墳(前方後円墳、45m)が造営され、6世紀代における当地域勢力の有力化が指摘されている(永沼ほか1985)。山田俊輔は、f字形鏡板付轡をもつ江子田金環

塚古墳、横山1号墳、さらに香取市禅昌寺山古墳(前方後円墳、60m)の存在をもとに、東京湾沿岸から養老川、一宮川・夷隅川を経て「常総の内海」とつながるルート(山田2015)の存在を想定している。そして台古墳群は、このルート上での要衝と思われる養老川・一宮川・夷隅川の間地点に位置し、一宮川方面へ抜ける道を見下ろす台地上に立地している。このように、5世紀後半から6世紀前半、つまりは雄略・継体朝期に東京湾から房総北部をつなぐネットワークが活発化すること、このネットワーク上における要衝地に位置することは、台古墳群鏡が当地域にもたらされた背景として重要な意味をもつと考える。

また、台古墳群とその周辺地域の研究においてももう一つ注目すべき点として『日本書紀』安閑天皇元年(534年)の条の記載がある。ここでは、伊弉国造稚子直の珠の献上遅延、春日皇后の寝殿への侵入、贖罪のための屯倉の献上という一連の顛末が記されている。国造制の成立をどの段階とするかという問題はあつたものの、『日本三代実録』にみえる「上総夷瀧郡人春部直黒主売」という名前の存在から、安閑朝に春日皇后のための部民(春日部)および屯倉が設置されたという点は、文献史学の研究でも一定の史実性が認められているようである(篠川1985)。この記載は横山1号墳の馬具や台古墳群の鏡との関連性が常に指摘されてきた(白井2002、栗田2005など)。本稿では鏡をもつ円墳の年代をMT15～TK43期と考えたが、この記載との関連性を掘り下げるためには、鏡の入手・副葬年代をより細かに絞りこむことが必要となる。しかし、様々な資料的制約もあり、現状では難しい。またこの問題は、夷隅川流域と入れ替わるようにして隆盛する武射地域の古墳とあわせて考える必要がある(栗田2005)が、これ以上は鏡の資料紹介という本筋を外れてしまうため、今後の検討課題とした。

また鏡が出土した円墳については、台古墳群中に存在する前方後円墳の後円部と径や高さがほぼ同一で、同じ企画のもとに作られたとする考えもある(小高1991)。当地域の首長層が同型鏡を手にし、副葬に至った経緯をより詳細に知るためには、良好な状態で残っている前方後円墳をはじめとした古墳群全体の調査研究が不可欠と考える。現状では情報が極めて限られており、鏡をもつ被葬者の出自や系譜についての研究の深化は、今後の調査の進展を待ちたい。

おわりに

以上、大多喜町台古墳群から出土した画文帯環状乳神獣鏡の資料紹介を行った。本鏡は極めて良好な保存状態にあり、これからの研究の進展や分析技術の革新によっては、さらに未知の情報を提供してくれる可能性を秘めている。千葉県立中央博物館は、今後ともこの資料を大切に保管するとともに調査研究を進め、その成果を広く発信していくことで房総の古墳時代研究と我が国の古墳

時代における地方豪族の実像の解明に寄与できれば幸いです。最後に、貴重な資料を長きに渡り守られてきた寄贈者に、改めて御礼申し上げます。

本稿は、「3-（1）」を石井・鈴木、「3-（3）」を初村、「おわりに」を高梨、「はじめに」を高梨・石井、その他を石井が執筆した。

謝 辞

本稿の執筆にあたり、九州大学 辻田淳一郎氏、奈良県立橿原考古学研究所 水野敏典氏、千葉県立房総のむら風土記の丘資料館 白井久美子氏には様々なご助言を頂戴した。また多くの先生方にご助言を頂戴できたのは、宮内庁書陵部 加藤一郎氏のご配慮によるところが大きい。馬具研究については、志木市教育委員会 木村結香氏に大変詳細なご助言をいただいた。

志摩市歴史民俗資料館 大前優子氏、高崎市観音塚考古資料館 三浦茂三郎氏、埼玉県立さきたま史跡の博物館 水口由紀子氏、国立歴史民俗博物館 上野祥史氏、森谷文子氏、藤井齊成会有鄰館 藤井善三郎氏、大島啓輔氏には、資料の閲覧に際し多大な便宜を図っていただいた。また調査に際しては、千葉県立中央博物館 米谷博氏、須田華那氏、渡瀬綾乃氏、千葉県教育庁教育振興部文化財課 吉野健一氏、菅澤由希氏、松浦誠氏、早稲田大学會津八一記念博物館 谷川遼氏に多大な援助をうけた。

X線CT画像については、勾玉を千葉県産業支援技術研究所材料技術室 太田大貴氏、鏡を東京都埋蔵文化財センター 長佐古真也氏に撮影していただいた。

末筆ではございますが、本稿作成にあたりご助言・ご助力をいただいた多くの皆様に、深く御礼申し上げます。

なお本稿には JSPS 科研費 22K00995（研究代表者：初村武寛）の成果を含む。

引用文献

- 夷隅郡役所 1923 『千葉県夷隅郡誌』 夷隅郡役所
 上野祥史 2000 「神獸鏡の作鏡系譜とその盛衰」『史林』83-4、pp. 560-600
 上野祥史 2013 「祇園大塚山古墳の画文帯乳神獸鏡—同型鏡と古墳時代中期—」『祇園大塚山古墳と5世紀という時代』六一書房、pp. 107-134
 内山敏行 2023 「永野川流域の古墳時代大刀と馬具」『とちぎ未来づくり財団埋蔵文化財センター研究紀要』第31号、pp. 33-48
 梅原末治 1941 『宮崎縣史蹟名勝天然紀念物調査報告』11 宮崎縣
 梅原末治 1946 「本邦古墳出土の同範鏡に就いての一二の考察」『史林』30-3、pp.18-39
 小高春雄 1991 「第2章 第四節 古墳時代」『大多喜町史』、pp. 155-180
 片平雅俊 2017 「茨城県域における馬具出土古墳の様相」『馬具副葬古墳の諸問題』、pp. 47-60
 川戸 彰 1979 「伊基国造と古墳」『千葉県の歴史』18、pp. 65-

- 74
 川西宏幸 2004 『同型鏡とワカタケル』同成社
 関西大学文学部考古学研究室編 1992 『紀伊半島の文化史的研究考古編』清文堂出版
 栗田則久 2005 「伊基のミヤケ」『月刊考古学ジャーナル』533、pp. 11-14
 車崎正彦 2003 「稲荷山古墳出土の画文帯環状乳神獸鏡を考える」『ワカタケル大王とその時代』、pp. 70-97
 群馬県教育委員会 1963 『群馬県埋蔵文化財調査報告書1：上野国八幡観音塚古墳調査報告書』群馬県教育委員会
 小西正彦 2008 「同範・同型鏡における重さの差異について—三角縁神獸鏡の場合—」『古代』第121号、pp. 23-59
 小林行雄 1965 『古鏡』学生社
 小林行雄 1966 「倭の五王の時代」『日本書紀研究』2、pp. 130-162
 埼玉県教育委員会 1980 『埼玉稲荷山古墳』埼玉県教育委員会
 斎藤 忠 1980 「上総大多喜古墳の画文帯環状乳神獸鏡をめぐって」『総南博物館報』第14号、pp. 1-2
 篠川 賢 1985 『国造制の成立と展開』吉川弘文館
 志摩市教育委員会 2018 『平成23-28年度志摩市遺跡発掘調査報告』
 島田孝雄 2003 「群馬県における後期古墳の諸段階」『後期古墳の諸段階』、pp. 73-92
 白井久美子 2002 「110 台古墳群」『千葉県の歴史』資料編 考古2、pp. 346-348
 鈴木 勉 2016 『三角縁神獸鏡・同範（型）鏡論の向こうに』雄山閣
 滝口 宏 1953 「上総大多喜の古墳」『古代』第9号、pp. 1-7
 田中由理 2004 「f字形鏡板付轡の規格性とその背景」『考古学研究』51-2、pp. 97-117
 田中由理 2005 「剣菱形杏葉と6世紀前葉の馬具生産」『待兼山考古学論集—都出比呂志先生退任記念—』、pp. 641-656
 玉口時雄・大川 清 1954 「上総上瀑村打岡台の古墳」『古代』第13号、pp. 18-23
 千葉県郷土資料刊行会 1972 『改訂房総叢書』
 辻田淳一郎 2018 『同型鏡と倭の五王の時代』同成社
 土屋隆史 2020 「古墳時代中期における金工品の編年—胡籙金具・冠の検討を中心に—」『中期古墳の現状と課題IV』、pp. 37-50
 永沼律朗ほか 1985 『上総 江子田金環塚古墳発掘調査報告書』市原市教育委員会
 中村安孝 1972 『夷隅郡誌』夷隅郡役所
 奈良県立橿原考古学研究所編 2018 『黒塚古墳の研究』奈良県立橿原考古学研究所研究成果第13冊 八木書店
 初村武寛 2020 「3D データを用いた同型鏡群の比較検討Ⅰ」『元興寺文化財研究所研究報告2019』、pp. 1-44
 初村武寛 2021 「3D データを用いた同型鏡群の比較検討Ⅱ」『元興寺文化財研究所研究報告2020』、pp. 9-58
 初村武寛 2022 「3D データを用いた同型鏡群の比較検討Ⅲ」『元興寺文化財研究所研究報告2021』、pp. 1-46
 初村武寛 2023 「3D データを用いた同型鏡群の比較検討Ⅳ」『元興寺文化財研究所研究報告2022』、pp. 67-82
 花谷 浩 1986 「素環鏡板付轡の編年とその性格」『山本清先生喜寿記念論集 山陰考古学の諸問題』、pp. 239-276
 樋口隆康 1960 「画文帯神獸鏡と古墳文化」『史林』43-5、pp. 673-689
 樋口隆康 1981 「埼玉稲荷山古墳出土鏡をめぐって」『考古学メモワール』、pp. 1-16
 藤井善三郎 2014 『祖先文化へのまなざし：永遠の美』藤井齊成会有鄰館
 堀内紀明 2007 「上毛野地域出土の環状鏡板付轡の分類と編年」『法政考古学』第33集、pp. 27-59

- 堀内紀明 2017 「埼玉県出土の馬具と副葬古墳の様相」『馬具副葬古墳の諸問題』、pp. 103-116
- 松尾昌彦 2004 「(12) 馬具」『千葉県の歴史』資料編：考古 4 (遺跡・遺構・遺物)、pp. 844-855
- 松崎元樹 2017 「南関東における馬具副葬古墳の諸相」『馬具副葬古墳の諸問題』、pp. 117-138
- 水野敏典 2003 「鉄鏃にみる古墳時代後期の諸段階」『後期古墳の諸段階』、pp. 29-41
- 水野敏典 2021 『三次元デジタル・アーカイブを活用した青銅器製作技術解明の総合的研究』奈良県立橿原考古学研究所
- 宮代栄一 1998 「「無脚雲珠」の型式学的研究」『土曜考古』22、pp. 81-107
- 森 輝 1977 『夷隅風土記』千葉県文化財保護協会
- 山田俊輔 2008 「雄略朝期の王権と地域」『史観』158、pp. 100-115
- 山田俊輔 2015 「「常総の内海」をめぐる古墳時代中期社会の研究」『考古学論攷Ⅱ』、pp. 233-244
- 渡辺包夫・實藤 遠 1955 「上総大多喜町高谷の古墳」『古代』14・15 合併号、pp. 70-74
- 渡辺包夫 1964 「上瀬部落出土の漢式古鏡メモ」『総南文化』第 2 号、pp. 23-24

図表出典

- 図 1 三次元形状計測画像は初村作成、写真図版・断面図は石井作成。
- 図 2・3・5・12・13 石井作成。図 13 は国土地理院地理院タイル陰影起伏図を使用し QGIS でデータを加工。
- 図 4 上：寄贈写真をもとに石井作成。中央：(滝口 1953) p.6 第 2 圖を改図転載。下：朝日新聞社提供。元写真は 朝日新聞 1978 年 12 月 15 日、朝刊、P.1 に掲載。
- 図 6・7・9・11 石井撮影・作成。資料の所蔵機関は、埼玉稲荷山古墳：文化庁、埼玉県立さきたま史跡の博物館貸与（国宝）、八幡観音塚古墳：高崎市観音塚考古資料館（重要文化財）、波切塚原古墳：志摩市歴史民俗資料館（志摩市指定有形文化財）、宮崎県山ノ坊古墳：国立歴史民俗博物館（重要美術品）、伝福岡県京都郡：藤井有鄰館（重要美術品）。画像は各所蔵機関に許可を得て掲載。
- 図 8 初村の計測成果をもとに石井作成。
- 図 10 初村作成。
- 表 1 各文献を参照して石井作成。
- 表 2 体積は三次元データをもとに初村が算出、その他は石井作成。なお埼玉稲荷山古墳鏡の重量については、埼玉県立さきたま史跡の博物館 水口由紀子氏に計測データをご提供いただいた。